

読売新聞記事検索ソフトについて（読売新聞 二〇〇七年二月十一日掲載）

「これはすごい」の一語につきる。

システム一式を借りて、事務所を訪ねてくる学生、編集者などに自由に使わせてみた。みんな「これはすごい」の連発である。

ある編集者は、「バラバラ事件」のキーワードを検索してみたら、戦後一、二だけで、三百四十件も出てきた。「バラバラ事件大全」みたいな本がすぐにできる」と喜んでいた。

そもそも何時から「バラバラ事件」と言うようになったのだろう。さらに検索していくと、昭和戦前期・明治・大正を合わせて同種事件が 何百件も出てきたが、「バラバラ事件」の表現が出てくるのは昭和七年からと分かった。その前は、「ブツ切り事件」「コマ切れ死体事件」「八ツ切り事件」などが使われていた。そういう事件全部が、「バラバラ事件」のキーワードでちゃんと一発で出てくるように検索エンジンに工夫が凝らされているところがすごい。

明治文化を研究している院生が、「これまで国会図書館に通って、読みにくいマイクロフィルムと取り組み何ヶ月もかけて引き出したと同じ情報がたった数時間できれいなプリントアウトで手に入ってしまうんだから、今までの苦労は一体なんだったのかと思ってしまふ」と言う。科学史で環境問題の変遷に取り組んでいた学生が、「明治大正の昔から公害環境問題がこんなにあったんだ」と、ビックリする。

私は「天皇と東大」を書くとき、あの戦争の時代をもっと詳しく知りたいと思つて古本屋で昭和十六年から昭和二十年までの新聞の古いボロボロの縮刷版を買った。それを何ヶ月もかけて一ページずつ全部めくって読んだ。読みにくいし、早くページを繰ると破けてしまつたりする。それがこのシステムだと、自由自在のスピードでページをどんどん繰っていきける。新聞を丸ごと読んでいくと、時代の見え方がまるで違ってくる。

昨日は満州事変前後の数年を、このあたりが昭和激動期のはじまりのキーワードと思つて、一挙にめくって読んだ。今日は終戦直後の時代をどんどん読んでいった。新しい発見が次々にあった。

このシステムの出現によって、近現代史の研究環境は全く変わったといつてよい。これを使える環境にあるかどうかで、研究論文の生産効率も、もの書きの作品産出量も、十倍どころか百倍くらい違ってくるだろう。